

はてのない家

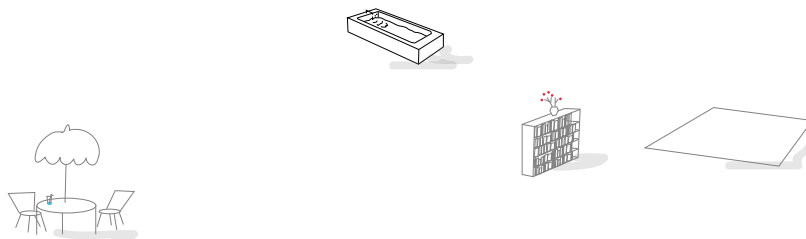
千葉研究室 畑 裕子



■ 細い部屋とのびていく部屋

これまでに単身者のためにつくられてきた住まいというのは、一室にぎゅっと生活が押し込まれたものであったように思う。

そのように押し込まれた住まいを広げたら、生活は一体どう変わるのだろうか？



物理的には小さな家であってもその小ささが窮屈さを生むのではなく、逆に小さいけれどもたくさんの場所があって無限の広がりを含んでいるような家。

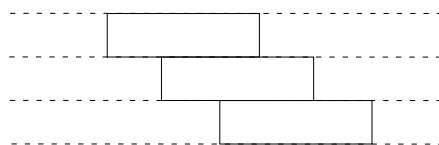
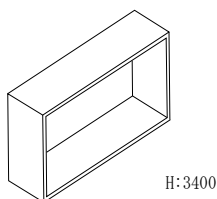
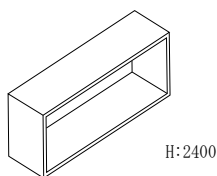
それは、両手を広げれば外に手を浸すことができそうな細い部屋と、歩きながらどんどん自分の行く先がのびていくような部屋によってつくることができるのではないだろうか。

そのような2つの性質が一緒に封じこめられたはこによってつくられる家を考えて。

■ ルール

1800×6300の細長いはこを長手方向に平行にずらしながらつなげていだけで家をつくる

(単位mm)



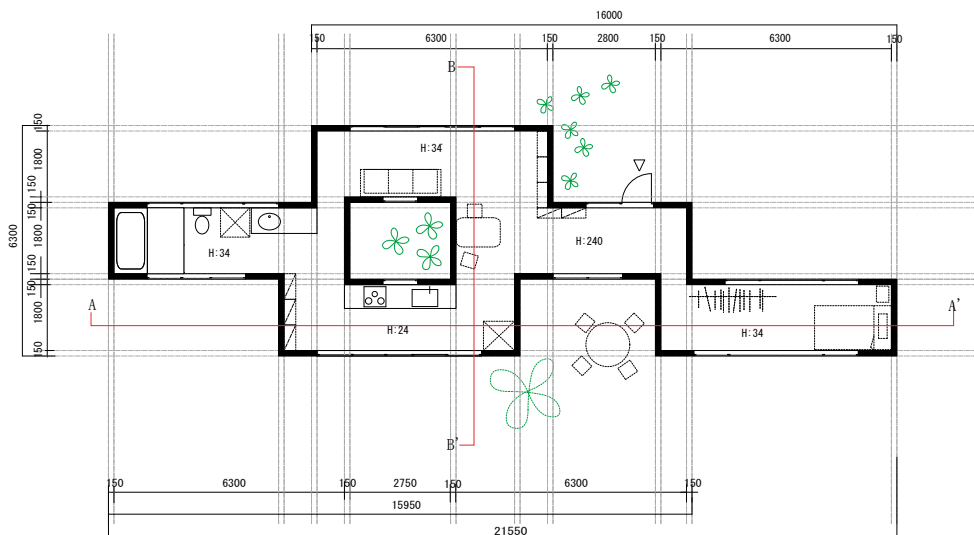
つなげ方例

はこは高さ2400・3400の2種類を用意する。

敷地や住み手に応じてはこを組み合わせ、ずらしながら自由に家をかたちづくっていく。

また、はこは生活の変化に合わせて後に付け足して増築することも可能であるし、減築することも可能である。

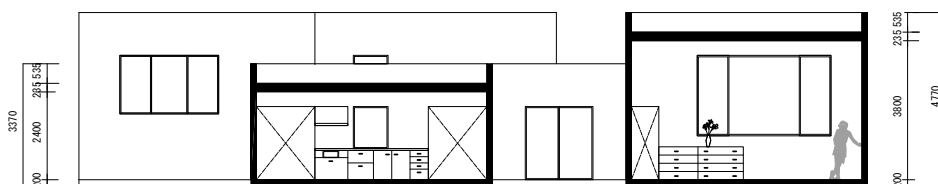
■プランニング例



a
 d b
 c

建築面積：75㎡
 延床面積：66㎡

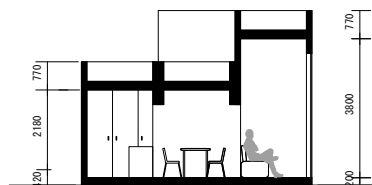
平面図



A-A' 断面図



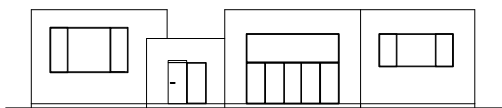
はてのない家のさまざまな窓の重なりあいを見る



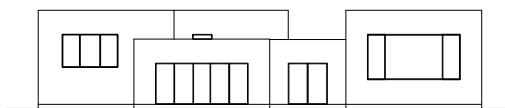
B-B' 断面図



広がった場所がダイニング



a立面図



c立面図



外が近くて、天井の高い寝室



はこを組み合わせたことで偶然できた中庭

はこがずれて重なり合った部分は、突如として広がりのある場所となる。

家の周りには、はこ同士のずれた部分によって囲われたような場所ができ、外もまるで家の一部のようにどンドン取り込まれていく。

ある点に立つと先が全く見えないのだけど、少し歩くとパッと一気に隣のはこや向こうの外が目飛び込んできたりする。

そのようにして自分の身体を取り巻く空間が迫ってきたり離れていったり、低くなったり高くなったりしながら、一体自分の家がどこからどこまで続いているのか分からないような家ができている。

■展開

はこは、さまざまな敷地に応じて自在につなげていくことができる。

ここでは宅地の代表的な敷地である四角い形状の場合と旗竿形状の場合について、建て方の一例を見てみることにする。

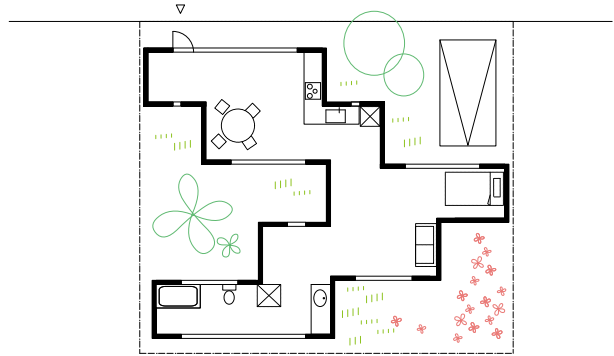
・四角い敷地の場合

ほぼ正方形の敷地に、はこの長手方向が道路側に面して建てられている。

敷地を三分割するようなくの字型ではこがつながれているため、家のまわりに性格の異なる庭が3箇所に分たつてできている。

はこ同士がつながって広がった場所をダイニング・キッチン、リビングとして一体的に使い、小さく囲われた場所を寝室として使っている。

家の中を奥へ奥へと進んでいくと、道路側の賑やかさから逃れた、静かな落ち着いた場所が広がっている。



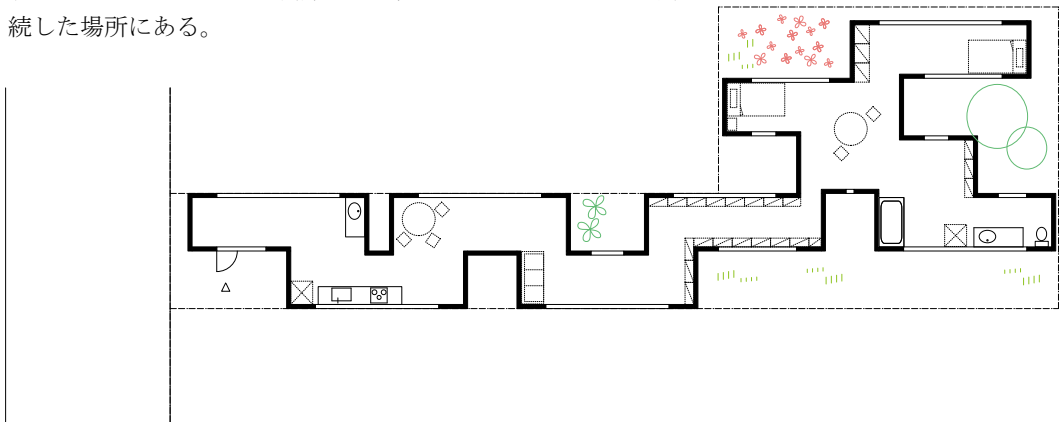
・旗竿敷地の場合

はこが1800×6300と小さいため、竿の部分にも建てることできる。

ここでは、家族3人で住んでいる例を見てみる。

玄関を入ると、細い一続きの空間が奥へと伸びていて、そこはキッチン、ダイニング、リビング、図書室、といったように家族の共用空間が展開されている。

親の寝室は独立性の強い場所にあり、子どもの寝室は共用空間に連続した場所にある。



■ 「はてのない」 こと

「1800×6300の細長いほこを長手方向に平行にずらしながらつなげていだけで家をつくる」

というルールは、結果として、単身者のためのものにとどまらず、家族で住みたい人や、後に家を大きくしたい人たちにも対応するものとなった。

天井の高くて細い場所、天井が低くて広い場所、小さな中庭、窓が高くにある場所、低いところからある場所、といったように、この単純なルールによってまず最初にたくさんの場所がつけられる。

そしてそこに住む人はそのたくさんの場所に自由に名前をつけていく。

つけた名前はいつでも変えることができるし新しい名前をいつでもつけることができる。

そのようにこの提案において私は、住み手と住まい方の両方を許容する大きな原理持つプロトタイプ住宅をつくることを目指したのである。

また一方で私は、この家において、家に住んでいるのだけれどもそれと同時に外にも住んでいるような生活を出現させようとしていたのだと思う。そのような生活の出現を望んだのは、量産される現代の住宅があまりにも閉鎖的で、生活が家の内部においてしか展開されていないからである。窓がついていてもその窓と部屋そのものには何か目に見えない分厚い壁が在るよう感じられる。もっと窓、つまり外が近くて家中を風が流れていくように、住むことができないかと考えていたのである。

「はてのない家」において提案したこの1800という部屋の厚さはそういった近さをもたらし、自分が居る家の中の場所と外の場所を等質なものとして捉えることを可能にしたのではないだろうか。

毎日の生活のなかで、いつも外を感じることができる。

空の青さや葉の緑色や日の光が日々変化していることや、朝と夜のしみわたるような静けさに気づいたり。子供が元気に学校へ行く様子や、車が走り去っていく音、花や雨のにおいが家の中にまで飛び込んでくる。そういう家の周りに広がる外は、はてしなく自分が住む街からとなりの街へ、そしてまたそのとなりの街へとつながっていく。

はてのない家。それはつまり、自分の家の壁を飛び越えて、街そのものに住んでいるのだと感られる家なのだと思う。